

磯田湖龍齋「俳諧女夫まねへもん」

浅野秀剛

筆者は、『浮世絵細見』（講談社選書メチエ、二〇一七年）のなかに「豆男春画の謎」の一節を設け、磯田湖龍齋の代表作である「俳諧女夫まねへもん」について述べた。それは横中判錦絵二十四枚組の作品で、画帖体裁で発売されたことは確かであるが、原装のものは確認されていない。その時点で筆者は全体の過半しか確認してはいたなく、いつか全体を紹介しなければならぬと思った。現在も全図を完全な形で確認できたわけではないが、ほぼ全容を把握できたので、紹介して補説したい。その詳細は【表1】をご覧ください。

基本的事項を再掲すると、「俳諧女夫まねへもん」は鈴木春信画「風流艶色真似るもん」の続編として企画され、春信判と呼ばれる大きい中判の組物で、版元は西村屋与八（永寿堂）である。

上部に波形があるが、その上は白、右辺に詞書と発句、画中には詞書と会話体の書入れがある。刊年は、中判の寸法を根拠に明和七年（一七七〇）中と推定される。理由は、「俳諧女夫まねへもん」の図の大きさである。明和七年七月頃を境に、中判錦絵の規格が小さくなり、大きな中判（俗にいう春信判28×29×21×22cm）から小さめの中判（26×27×19×20cm）に変わる。もし「俳諧女夫まねへもん」が明和八年正月の刊行であれば、大きな中判という事実と矛盾するので、明和七年のうちに刊行された可能性が高いと考えられる。その詳細は『浮世絵細見』を参照いただきたい。

翻刻は、図番号、右辺の詞書と発句、画中の詞書と会話体の書入れの順に記し、その後図様などを補記した。掲載する図は国際日本文化研究センター（以下、「日文研」という）所蔵のものを

中心に選んだが、右辺の文字部分が削除、または消えているものや、日文研に所蔵されていないものは個人蔵その他で補った。なお、文字がカットされているもの、読みづらいもの、他の資料で補えなかったものは「……」で示した。また、読点は筆者が付し、翻刻の一部は、慶應義塾大学アート・センターが公開している渋井清ノートおよび渋井清「湖龍齋の埒外画」（『尾崎久弥教授古稀記念論文集』名古屋商科大学、一九六一年）などで補った。渋井清ノートを見ると、渋井氏は「十一」図以外は確認していることが分かる。



図1 個人蔵

○去し年かの春子まねへもんといへる名をうみ出し世にしらしめ……に來陽にいたらは、ねこしま深川国おもむかんと有は……

いでや春詠ぞ深し花の奥（馬？）一散人

（男）せんとのこしやもの、のらいでどうせう

（まねへ）てもしやれるは、ふりのそでからとはよりかぜも
とき、はやくとりかぢく

屋形船「永寿」丸に乗り本所・深川に渡る人々。右下にまねへがいる。永寿丸に轡紋（この紋は組物に頻出する）の提灯が描かれているが、西村屋与八と関係があるか。



図2 『三田アートカタログ』60、より複写

①ねこしま……

久しく住めはかんどうもん…などゝいへは……

しつふかき川のなかれのあやめ哉

さてしもあらぬに、ねこしまにいたり、六間^{けん}がなだといふ所
にাগりけん、ばんふだあらためせきしよままゝにやとに
つけば、あたまからひつたり山のふうけい、また一ふうかわ
つてうま事く

(まねへ)てもどこへきてもしつなやつ、あゝつよいきつ
さきだ、いよきまり、いよまめくふく、はやくツどこめ
く、いやアめくつてしよ

(階段の女) 幸せんせひめ

「六間がなだ」とは六間堀のことであろう。その岡場所での情
景であろう。「幸せんせひめ」の意味は不明。まねへが坐ってい
るのは通い夜具。階段の前帯の女は娘分(遣手のような女)か。
手に持っているのは鍵の束と思われる。



図3 国際日本文化研究センター蔵

③ 法界のてらの眼下にみへければ
打合す鐘や突木の早蕨

(まねへ) やアはアあちらのめしのいろ子めく、てもすこ
ものく、あのばちてた、かれてはいかなたいこもたまら
ぬく

(女) いろじやござんせんがいつそきのいゝ人さ

(男) ほんにいきなみだのふ、やぼじやあるまひ、ねこてあ
ろ

(男) ぬしのいろか、どれおかをおがみましょ

(小女) あれまで、あみの五良さんがきやす

左に描かれているのは、堅川と横川の交わるあたり(現、緑四丁目)にあった時の鐘か。だとすると入江町辺。「いろ子」の意味は？

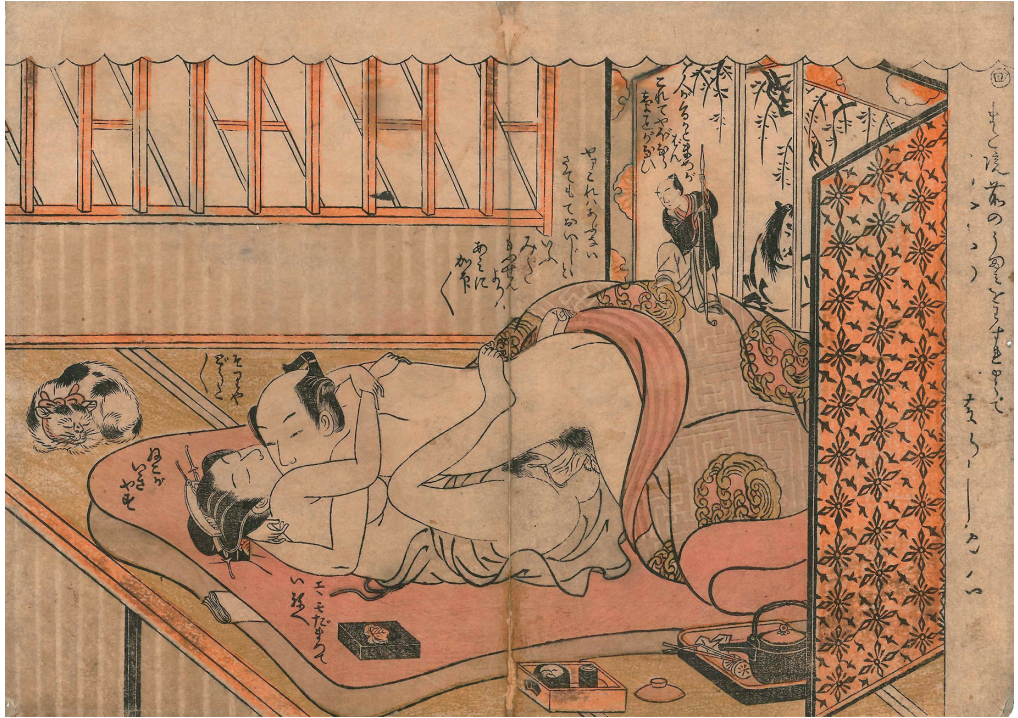


図4 個人蔵

④また院前のうまみをわすれやらで
若竹やからまる藤のしめ心

(まねへ) 人がくるかとまめがばん、これてやぼならしよこ
とがなひ、やアこれはあぶない、さてもておいじょといふ
みだ、もふせんよりはあみにか印く

(男) そりやどうか

(女) エ、モだまつていねへ、ねこがいきやす

この図も「ねこしま」の情景ということになる。



図5 Japanese erotic prints: Shunga by Harunobu & Koryūsai. Hotei Publishing, 2008 より複写

⑤ねこしまもそこ、のふぜいをながめ、日も重りぬれば、
いざや深川国へおもむき、よびだしのうらをも一見せばやと、
さまよひける道すがら、かたへに旧跡あり、あしのゆきなり
にまつあひ宿へ付て、みればも、と柳のもつれ合いける
前髪やかなれの身にも花心

(まねへ) ありかたやとうとや、なむ八まん大ぼさつ、わた
くしにすいなる女ぼう、おんさづけ下されかし

(女) おまへはどこにおなじみがあるへ、まつすぐにいくな、
どうせうのふ、にくらしい、わつちにはかりきをもませて
(?) そんなものさ、こゝはかゞやといふ

待合宿の情景。年増の女と前髪の若い男。まねへは女房が欲しい
と八幡様に祈っている。



図6 国際日本文化研究センター蔵

④かくてまねへ、りよしゆくのこんたんもしまい、是より深川国へいそがんと、かどをいつれば、小人しまより鶴のくわへ来りたるよしにて、豆女をかこに入さらしおきたり、これまつたく八まんわれにさつけ給ふ也とて、こいうけたきよしをねかふ
 小人女めを神媒なだちやめうが竹

(左上の男) いや、おまへのおかみさんには大のきまり、あ
 いまだていらざさ

(まねへ) さて、よいおしたてのおむすしや

(女) あゝこれさおはなしあそばせ、おたみさんにいつつけ
 やすぞへ

(男) これわてう茶やまでつれて二かいをかりて、ちよんき
 めはとうてあるふ

まねへは、小人島から鶴がくわえてきたきた豆女「おまね」を買い求め女房にする。籠には「売もの」の札が貼られている。手前では二人の武士が女を強引に連れていこうとしている。「てう茶や」とは鳥茶屋、つまり花鳥茶屋の類か。

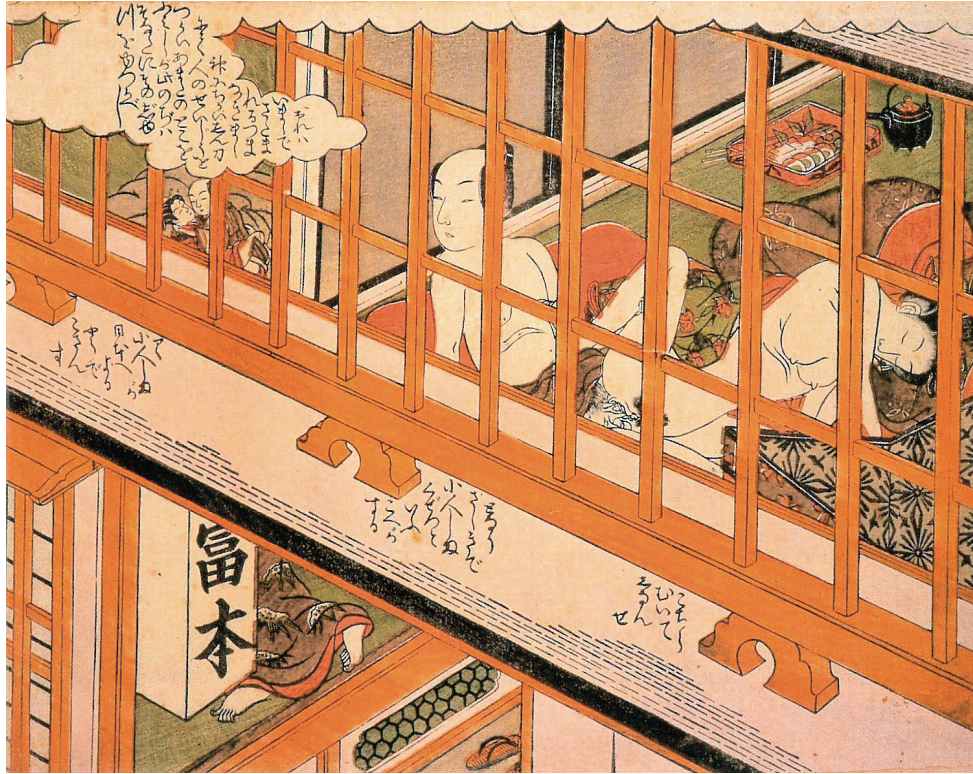


図7 白倉敬彦『春画と人びと 描いた人・観た人・広めた人』（青土社、2014年）より複写

㊦（右辺の詞書・発句は不明）

（女）こちらむいてしなんせ

（男）となりざしきで、小人しまくぜつといふこへがする

（まねへ）おれはいまゝでさたまれたるつまなきまゝ、神に

ちかいしん刀にて人のせいじうをつかい、あまたのそこを

ふみしが、此のちはそなたにそのじゆつをゆつるべし

（おまね）アゝ小人しまが日本へよるやうでござんす

「富本」と書かれた掛行燈のある家の二階で交わる男女。屏風、提子、酒肴盆が見えるので貸座敷（待合茶屋）のようなところか。隣室でまねへとおまねが契っている。



図8 国際日本文化研究センター蔵

④まねへは大きやうがみなとより舟に乗て、品川浦へおもむくべしとて、女ぼうおまねをのこし、なんじ深川国をしまい品川にておち合へしとてわかれぬ
二代目も粉米さくらの系かほかな

(おまね) 此おとこの一もつは女のすくたちだ、すご印く

(男) もしおみつさんとやら、ごめんなされ、かの中ぼしのか

(右の女) おみつさん、あげやせう

(左の女) わつちやよつているよ、もふせんのよふになつたそふさ

深川でのおまねの見聞。「大きやう」とは大橋、すなわち新大橋での情景か。煙草入に「湖籠」とある。行灯に「お十様そんなおとら様より」と記されている。



図9 国際日本文化研究センター蔵

④かくておまね、大きやうかみなともそこくにいつまこひして、ふか川こくへおもむき、古せんしやうのうらやくらを一けんしける
くらのなれし腰^{こし}のてからや下り藤

(男) どうしやよいか、大こしにつかや

(女) いつそエゝじつとしていなんし

(おまね) てもとこがけをはたらくは、しんごさころしめ

「古せんしやうのうらやくら」は古石場の裏櫓の意か。とすれば深川七場所のうちである。

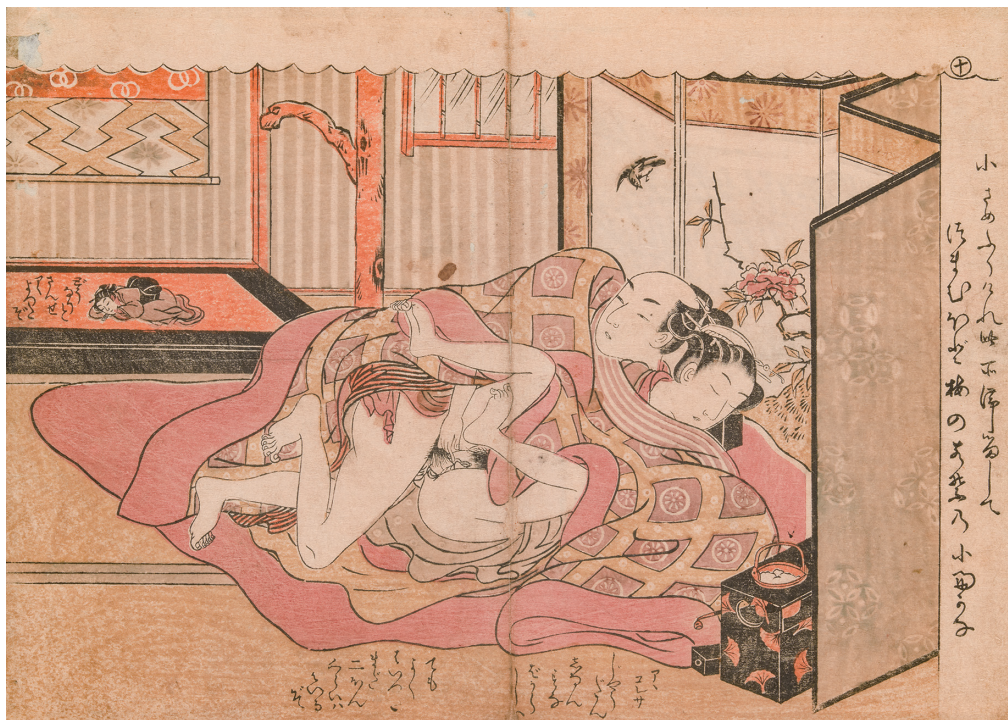


図10 国際日本文化研究センター蔵

⊕
 小
 さ
 め
 ふ
 り
 け
 れ
 此
 所
 滞
 留
 して
 つ
 ま
 む
 ほ
 ど
 梅
 の
 若
 葉
 の
 小
 雨
 かな

⊕ 小さなめふりけれ、此所滞留して
 つまむほど梅の若葉の小雨かな

(女) ア、コレサじやうだんしなんすな、ばからしい

(男) てもよくはいつた、まだ二ほんくらいははいるぞ

(おまね) どうなりとさんせ、ア、よつたぞ

陰部に一物と指を入れて戯れている。おまねは酔いつぶれの態。
 外は雨。



図 11 国際日本文化研究センター蔵

① 万物みなひやうりあり、もはやうらはしまいたれば、いざ
やおもてへうつらばやとて
ぬひかへすひとへはをりのうらおもて

(男) ちとめつらしく、しんぞうとでやうか

(女) よふござりやしやう、さあこちらへおいであそはせ、

よい子どもあげやしやう

(おまね) あゝえいさめでのどかかわくぞ、このいろ事を

ちとみませう

深川の表櫓か。「しんぞう」は新造、新しい(若い)遊女の意。
深川では遊女のことを「子ども」といった。傘に「はな」の木札
が付いている。おかみ(娘分?)は(二)の女と同じく鍵束を持つ
ている。



図 12 慶應義塾大学アート・センター波井清コレクション

①香もゆかし舌につをもつ 青山榎

(女) 一ふくのんでほうらくをうたいなんし

(男) 一ツさけ口のみ給へ

(おまね) ハ、いたゞきませう、ねづみかたそな、しつ

く

(座頭) おまへのおざしきへは、はしめてござります

座頭に芸を所望する二人。屏風に「湖龍」と記されている。



図13 個人蔵

① されはおまねは、ふか川国もそくにしまい、品川へおもむき、おつともたいめんせんと、まつたかなわにつきてたづね来る妻の心や一夜酒

(右の女) うをと水とはさんさア、中よいはづよ

(左の女) 申つと上ケまふしませう

(男) しんしゆくのうちで、よい女良のある所へゆかふ

(おまね) おふぎぱちくろのはをり、きんくと色おとこ
きまります

高輪の茶屋の二階で芸妓と酒宴。男はこれから歩行新宿へ行こうと言っている。



図 14 国際日本文化研究センター蔵

⑭ 豆植る手きわも雨露の恵かな

(男) サアこれはたまらぬ、まつ一ツきまろふ

(女) まあちつとおまちなんせ

夏の歩行新宿での情景か。



図 15 国際日本文化研究センター蔵

④此所にてまねへにおちあい、つもりしものがたりし、これよりかわりく一けんせんとて角の無きとしぞ西^{さい}瓜^{くわ}の目引かな

(男) これは上かいすいこむく

(女) アゝそこをくエゝモどうせう

(まねへ) さあこれからはかわりくしゆげふして、よし町をみませふ

(おまね) なつかしかつたわいな

品川宿での情景。まねへとおまねがおち合う。発句の「角の無きとし」とは角の無き年、つまり、虎(寅)や兔(卯)年をいい、西瓜の皮の近似から虎を連想させるとすれば、寅年||明和七年となるが、果たして。



図 16 国際日本文化研究センター蔵

④女ぼうおまねは、よし町のかたへおもむぬれば、まねへは
此所にのこり、一ひやうばんせんとて、そこかしことはいく
わいしける

まもる目に猿まの手がらや牛房引ごぼうひ

(まねへ) こりやちよんのまか、すごいやつの

(女) もじさださん、ばからしいにへ

(左の男) これはもふせん、おつとおだまり、だまらんせ

(遠くの女) いま御めしをたべていなんす

(遠くの男) おらが女良はおないきやくでもあるそふな

品川の大見世の大座敷での情景。



図 17 国際日本文化研究センター蔵

① 海山うみやまをこえるすかたやとりかぶと

(女) サアおびをときなんせ、おゝかわいい、どうせうのふ

(男) わたしやどうやはづかしい

(まねへ) テモひつなやつかな、女良かいはそんとくのある
ものかな、ふられるなかに此やうな

前髪の若い客と年増の女郎。



図 18 国際日本文化研究センター蔵

④素人近い女郎の顔淋し

(幼児) ほうやほう、あれくくく

(まねへ) これはちよんくはやいやつの

(女) あれとも様のこゑがする、しまはんせ

性交の最中に幼児が闖入。品川の旅籠屋とすれば、幼児はその主人の子か。

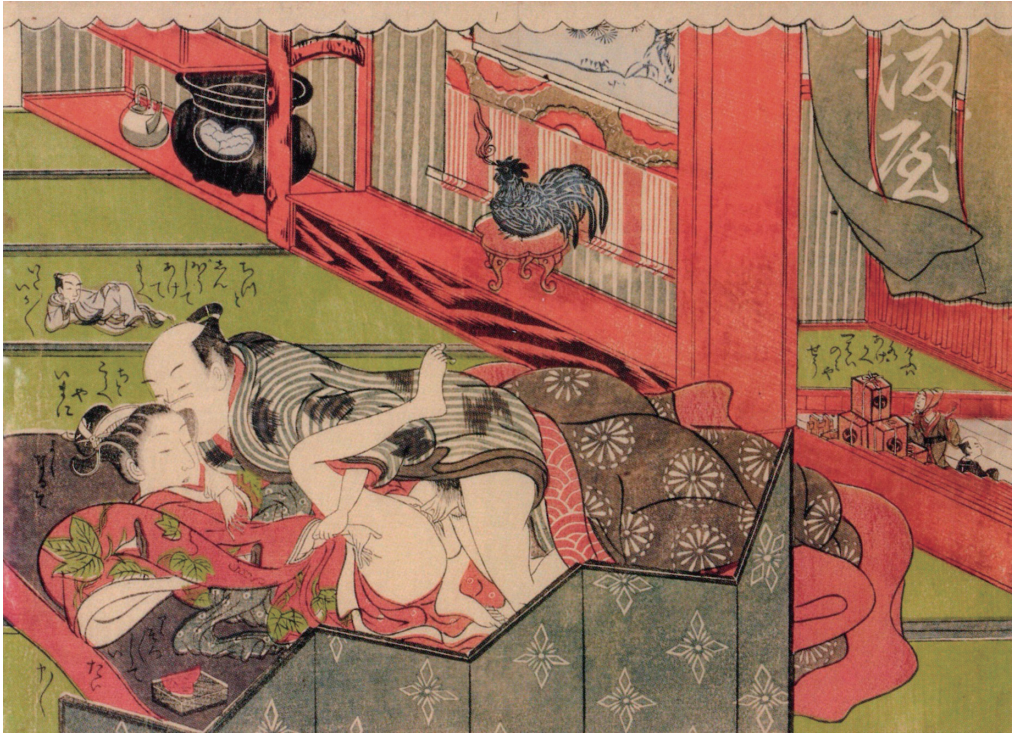


図 19 Important Japanese Prints, Illustrated Books & Paintings from the Adolphe Stoclet Collection. Sotheby's, 2004 より複写

④ 爐ひらきや茶杓ちやしやくに芥わもつかざりき

(右の小人) けふは水あげかへ、一はいのみやせう

(まねへ) ちつとしんぼうしてあけてもらへ、いたいかく

(男) ちところへや、いまによくならぞ

(女) アゝそろくして、いたいナク

「口坂屋」の暖簾の見世での水揚げの情景。入口に小人サイズの積物あり。



図 20 国際日本文化研究センター蔵

㊦ やき栗のはねたすがたやあまみ哉

(女) けさ六ツまへから、めをさましていたもの

(男) はるは茶やかぶでもかつて、女ほうにもとふはさ

(寝ている女) おゝさむ、これからこつちのせかい、ぐいね

く

女中に手を付ける男。見世の主人か。



図 21 個人蔵

④ いかくりの袂たもとにはぐる風吹ふぶきかな

(男) これはきついね入やう、めをさましてやるふ

(まねへ) ひきあげておしこめ、さてもたしかなばちかな

寝ている女にむりやり。



図 22 国際日本文化研究センター蔵

㊦ うづみ火や雪のはだへのとけ心

(おまね) さてもきやんをはたらくは

(陰間?) いつそばからしいぞへ

(男) しょく此事さ

おまねがいるので、芳町の情景と思われるが相手は陰間ではなく、
女か?



図 23 国際日本文化研究センター蔵

㊦はゞたきにおんあいふかしぬくめ鳥

(おまね) てもきれいく、どうもたまらぬいろ事く

(陰間) おまへ、此中のいんろう、いつおくれるぞ

(男) いんろうでもくひでもさ

陰間との色事。



図 24 国際日本文化研究センター蔵

④此ところにて、まねへふうふいであい、つもれるものかたりなどして、もはや年もみつれば、いざや一たびふるさとへ立かへらんとて
 年の矢に弓^{ゆが}返りはなしひとこぶし

(まねへ) ひさしぶりしや、そこらのあきさしきて、一けん
 でよふ

(右の女) やまさん、きれいなけんじやが、どふもよわい

(左の女) さんな、わやんかく、すむよく

(左の男) さあく、三けんしやうぶく

拳遊びに興じる客と陰間。まねへとおまねが出会う。

以下、『浮世絵細見』の記述を補説する。

「まねへもん」の子という設定と思われる「まねへ」が最初に向かうのは、ねこしま（猫島）、つまり、回向院前などの本所の岡場所である。（二）の六間堀や、（三）の入江町も本所の岡場所であった。（五）の待合宿（貸座敷、出会茶屋の類）も当時は盛んであったらしい。（六）（七）で「まねへ」と「おまね」は夫婦になる。（八）（十二）はおまねの深川見聞、（十三）は高輪でのおまね、（十四）（十五）は品川でのおまねで、そこで二人は再会する。（十六）（廿一）はまねへの品川見聞、（廿二）（廿四）はおまねの芳町見聞、そこで二人はまた落ち合って終わりとなる。

この組物は、絵だけではなく、詞書、書入れもすべて湖龍齋の筆と考えられる。それについて詳述はしないが、湖龍齋の春画の大半、また錦絵の画中の文字の多くは湖龍齋の自筆と思われる。

表 1

	2017年の『浮世絵細見』刊行時に明らかになっていた所蔵および掲載媒体	今回明らかになった所蔵および掲載媒体
第一図		デ・ヤング美術館、個人蔵
第二図		『三田アートカタログ』60 (2019年)
第三図	『第27回浮世絵オークション』(日本浮世絵商協同組合、2016年)	国際日本文化研究センター
第四図		個人蔵
第五図	Inge Klompmakers, <i>Japanese erotic prints: Shunga by Harunobu & Koryūsai</i> , Hotei Publishing, 2008	国際日本文化研究センター (2)
第六図	ボストン美術館 (3)、吉田暎二『春信』(アソカ書房、1953年)	国際日本文化研究センター
第七図	白倉敬彦『春画と人びと』(青土社、2014年)	
第八図		国際日本文化研究センター
第九図		国際日本文化研究センター (2)
第十図	『三田アートカタログ』14	国際日本文化研究センター
第十一図	ハーバード大学美術館	国際日本文化研究センター
第十二図		
第十三図	東京国立博物館、ボストン美術館 (2)、旧ベレスコレクション	個人蔵
第十四図	林美一『会本研究』20 (1985年)	国際日本文化研究センター (2)
第十五図		国際日本文化研究センター
第十六図	白倉敬彦『絵入春画艶本目録』(平凡社、2007年)	国際日本文化研究センター (2)
第十七図	慶應義塾大学アート・センター【渋井清コレクション】	国際日本文化研究センター (2)
第十八図	シカゴ美術館、『絵入春画艶本目録』、『新春版画目録』(神田神保町6店、2015年)	国際日本文化研究センター
第十九図	旧ストックレーコレクション、 <i>Important Japanese Prints, Illustrated Books & Paintings from the Adolphe Stoclet Collection</i> . Sotheby's London, 8 June 2004	
第二十図	『青裳堂古書目録・春画【別冊】』(1996年)	国際日本文化研究センター (2)
第二十一図	『第26回浮世絵オークション』(日本浮世絵商協同組合、2015年)	国際日本文化研究センター、個人蔵
第二十二図		国際日本文化研究センター (2)
第二十三図		国際日本文化研究センター
第二十四図	東京国立博物館、大英博物館	国際日本文化研究センター

() 内は所蔵が複数の場合の点数を示す。